

授業づくり

■ これまでの取組における課題

- 既習事項や他者の考え、これからの自分の人生と現在の自分の考えをつなぐことで、考えの拡充・深化を図る必要がある。
- 「か・す・や」の振り返りを通して、自己の変容に気づく場面の充実を図る必要がある。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～3つの「つなぐ」を重視した、自己の変容(=学びの価値)を実感させる授業づくり～

指導の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶「ひが中ナビ」を用いた授業展開の共有

◇ 本校の共通実践事項をまとめた「ひが中ナビ」を用いて、学習指導過程に応じた3つの「つなぐ(これまでの自分とつなぐ、他の人とつなぐ、これからの自分とつなぐ)」を重視した授業展開を提案した。その後、提案内容を意識した代表授業研修を行い、全職員で授業づくりの方向性を共有した。代表授業研修においては、教科部会を活用した授業改善サイクルによる学習指導の充実を図った。

学習指導過程	学ぶ意義・生徒の思考	トーク活動 ICT
これまでの自分とつなぐ。	導入。 めあて。 見通し。 自分の現状は(何を学習してきたのか)。 (何ができるのか、何を知っているのか)。 自分の課題は(何を、どうすべきなのか)。	セルフ。 ペア。
他の人とつなぐ。	展開。 多様な、新たな見方・考え方。 共同することの意義・効果。	ペア。 グループ。 全体。
これからの自分とつなぐ。	まとめ。 振り返り。 めあてに対する学習活動(内容)の終結・ゴール。 新たな疑問・問い・気づき。 次時以降への意欲(つなげたい・いかしたい・もう一度やりたい) ← 学びの価値 活用・応用への意欲(実生活で、他の教科で)。	セルフ。 学びの価値

【「つなぐ」学習のモデル】

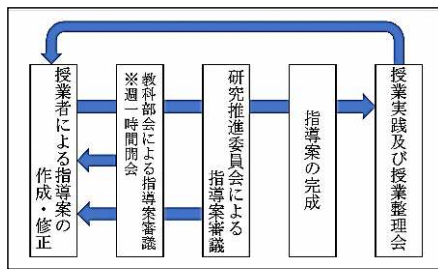
◀取組2▶「か・す・や」の振り返り内容の修正と実践

◇ 授業の終末段階に位置付けている「か・す・や(かくとくした事、すばらしい友達の意見、やってみようこと)」の振り返りの活動における視点を見直し、学習前後の自己の変容をより実感できるように修正した。また、代表授業研修や職員研修等を通して共通理解と実践を図った。さらに、よい振り返りの内容については、学級に掲示するなどして、生徒と振り返りのゴール像を共有した。

(取組1、2の成果)

- 「ひが中ナビ」の提案やモデル授業の実践を通して、3つの「つなぐ」を意識した授業づくりのイメージを共有することができた。それにより、教科部会において各教科の効果的な手立てや工夫を共有したり、よりよい手立てについて練り合ったりすることができた。
- 振り返りの内容を修正することで、授業充実度調査における振り返りの結果に向上が見られた(4件法において「R2前期:3.0」→「R3前期:3.3」)。生徒の記述内容についても充実が見られ、生徒に「学ぶ価値」を実感させやすくなった。

【教科部会を活用した授業実践サイクル】



■ 授業づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 既習事項とのズレや、生徒が興味・関心を示すような資料の提示をするなど、生徒の学習意欲を喚起する導入の工夫が必要である。
- C層、D層の生徒に対する授業での主体的な学びを促す支援の在り方を明らかにする必要がある。
- ◇ 生徒の「わからない」「困った」を事前に想定するなど、多様な支援を具体化する。
- ◇ C層、D層への支援を位置付けた授業の導入段階の工夫を行う。

組織づくり

■ これまでの取組における課題

- 授業づくりのための校内研修システムを構築する必要がある。
- 取組の共有と見直し、短いスパンで評価、改善を行う必要がある。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～全職員が自己の役割を明確に自覚して行う組織的な取組～

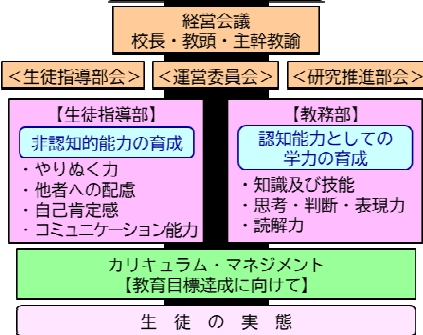
取組の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶ 研究推進体制の構築

◇ 校務分掌の役割を見直し、「非認知的能力の育成」を生徒指導部、「認知能力としての学力の育成」を教務部が担当し、全職員で学力向上に取り組んだ。また、小中9年間をつないだ取組を整理し、発達段階に応じた指導の充実を図った。

◇ 学力向上ロードマップを活用した校内研修を、PDCAサイクルの各段階に位置付け、各分掌の取組の充実を図った。

社会(他の人)の中で自分らしき・能力・可能性等を最大限に実現する【自己実現】



【研究組織図】

(取組1の成果)

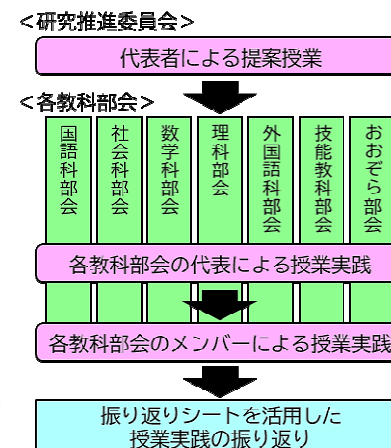
- 校務分掌を意識した取組を実践したため、教員の組織マネジメントへの参画意識が高揚した。

◀取組2▶ 教科部会の充実

◇ 教科部会を中心とした授業改善を推進していくために、研究内容の提案を「研究推進委員会」→「教科主任者会」→「教科部会」の流れで行った。

◇ 各教科部会で指導案検討後、研究推進委員会で指導案審議を行う体制を整えた。

◇ 研究推進委員会(週1回)、教科主任者会(月1回)、教科部会(週1回)を週時程に位置付けた。



(取組2の成果)

- 若年教員にとって教科部会が、経験豊富な教員から指導・助言を受けたり、授業に対する質問をしたりする場となった。

【教科部会を中心とした授業改善】

■ 組織づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 様々な活動を実施することだけによらない、管理職や責任者等による確実な見届けや、成果や効果等を全職員で共有するための工夫が必要である。
- ◇ 取組を確実に見届け、その状況を全職員で共通理解できるシステムを構築する。

授業づくり

■ これまでの取組における課題

- 教師主導型の授業展開で、生徒の主体的な目標設定や協働作業、教師による評価・称賛の場が不足していた。
- 教師相互での授業参観の機会が少なく、実践効果の共有が図られていなかった。

【課題解決に向けた取組テーマ】 ～生徒とつくる「芦中授業プロセス」の定着～

指導の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶「芦中授業プロセス」の定着

- ◇ 生徒が主体的で深い学びに向かうため、生徒とともにつくる『めあて』の設定、生徒が自分の言葉で記述する『まとめ』、1単位時間の学習を継続的に見とる「10のつぶやきを活用した振り返りシート」を活用した『振り返り』の確実な実施を中心とした授業づくりに取り組んだ。

◀取組2▶ ICTの効果的な活用

- ◇ 「芦中授業プロセス」の定着のため、1単位時間の中で、必要に応じてICTを活用するようにして、各実践の中から効果的な活用方法を精査して校内研修等で共有した。

(取組1、2の成果)

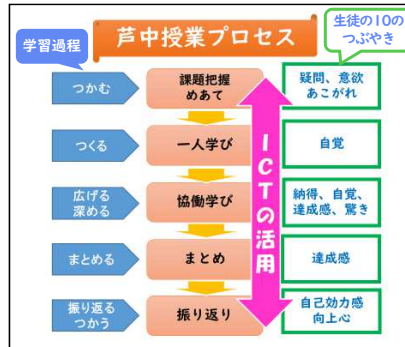
- 生徒からは、「『めあて』を意識して参加することで、何を学習するかが、よく分かった(4件法で3.10)。」、「『まとめ』を考えて書くことで、学習の成果を確かめることができた(同3.15)。」、「振り返りをするので、次の学習につなげることができた(同3.16)。」という声が多く上がった。特に「10のつぶやきを活用した振り返りシート」が記入しやすく、効果的であった。また、「学習の中でICTを使うのは勉強の役に立つ」という声が93%であった。

◀取組3▶一人一実践授業と相互参観の実施

- ◇ 「芦中授業プロセス」の定着とICTの効果的な活用を共有するため、一人一実践授業を行い、同教科を中心とした相互授業参観を実施した。授業参観では授業チェックリストを用いた評価を行い、グラフ化したものと、着眼1(「めあて」「まとめ」「振り返り」)及び着眼2(ICTの効果的な活用)に対するコメントをもとに各教科部会で振り返り、校内研修で全体に共有した。

(取組3の成果)

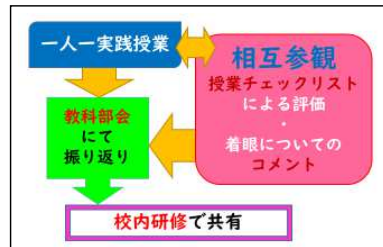
- 各教科独自の疑問点や悩みなど、授業実践に対する様々な意見交換をすることにより、新たな手法や改善策を共有することができた。



【芦中授業プロセスのモデル】

【めあて】	当てはまるものに○を付けよう!	その内訳をかく
①「なんで」(疑問)		
②「やってみたい」(意欲)		
③「できるようにになりたい」(あこがれ)		
④「なるほど」(納得)		
⑤「(何を)考えていて、いい/それでも、(どうも)」		
⑥「わかった」(自覚)		
⑦「わかん」(自覚)		
⑧「できた」(達成感)		
⑨「すごい」(賞賛)		
⑩「自分も頑張ればできる」(自己効力感)		
⑪「もっと」(向上心)		

【10のつぶやきを活用した振り返りシート】



【一人一実践授業後から研修会までの流れ】

■ 授業づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 教科の特性を活かした「振り返り」の徹底が必要である。また、年間を通して単元のゴール像が見える単元デザイン工夫が必要である。
- ◇ 次年度は「芦中授業プロセス」の各学習場面に応じたICT活用の充実を図るとともに、活用の分類と学習効果とを関連付け、各教科の特質に応じた効果的な活用方法を追究する。

組織づくり

■ これまでの取組における課題

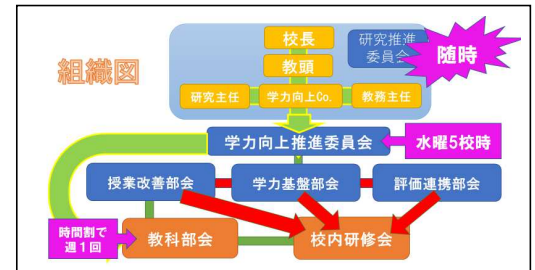
- リーダーである研究推進委員会が大人数のため、連携が不十分であった。
- 明確な検証改善サイクルが確立できていなかった。

【課題解決に向けた取組テーマ】 ～組織の再編成と長期的な方向性の確立～

取組の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶研究推進委員会のスリム化と教科部会の充実

- ◇ 教科主任を中心に構成していた10人の研究推進委員会をスリム化して5人にする事で、方向性や実践の協議を随時行えるようにした。
- ◇ 教科部会を週時程内に位置付けた。



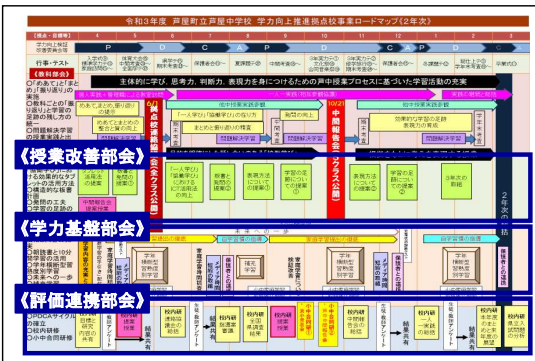
【研究組織図】

(取組1の成果)

- 長期的な見通しを立てることができるようになったことで、学力向上推進委員会、教科部会との連携がスムーズになり、学力向上に向けた取組の充実を図ることができた。

◀取組2▶年度当初の校内研修による目標とロードマップの共有

- ◇ 学力向上プランの取組を計画的に実践するために、3つの研究部会(授業改善・学力基盤・評価連携部会)を軸とした「研究部会ロードマップ」を作成した。年度当初の校内研修で1年間のスケジュールを提示し、目標、方針の共有と研究意識の高揚化を図った。



【研究部会ロードマップ】

(取組2の成果)

- 校内研修によるロードマップの提示と目標の共有を早い段階で行うことにより、1年間の見通しをもつことができるとともに、定期的な検証に繋がった。

■ 組織づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 各部会それぞれの実践内容は定着してきたが、部会相互のさらなる連携強化が必要である。
- ◇ 部会ごとに示した取組の検証とその内容の共通理解を図り、全職員への共通実践へと繋ぐことで連携を強化させる。

授業づくり

■ これまでの取組における課題

- 子どもが思考し表現する場が少なく、教師の説明過多になりがちな授業が多い。
- 生徒一人一人に課題意識をもたせて学習に取り組ませることができていない。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～「たっちゅうスタンダード」に基づいた、子どもが主体的に考える授業づくり～

指導の実際(以下の取組が効果的だった!!)

《取組1》「たっちゅうスタンダード」に基づく授業構想

◇ 全教科で共通に取り組む授業の基本的な型「たっちゅうスタンダード」に沿った授業づくりを構想した。新たな知識や技能を習得していく際に用いる「習得スタイル(教えて考えさせる授業)」と、知識や技能を活用・発揮する問題解決型の「活用スタイル」の2つの授業スタイルで授業を構想するとともに、どちらのスタイルにも位置付けている展開段階での協働学習、終末段階での振り返り活動の充実を図った。

《取組2》「めあて」「まとめ」「振り返り」の活動の充実

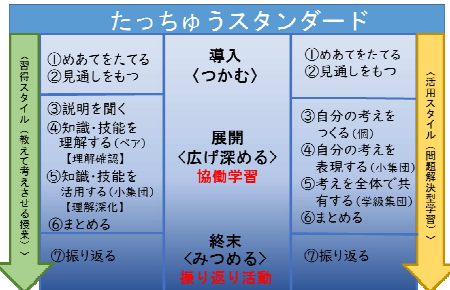
◇ 「めあて」「まとめ」「振り返り」を行う目的及び大切にしたいポイントを全職員で共有するとともに、指導案審議等において、ポイントに沿った協議を行った。特に、「振り返り」については、教科部会で振り返りの具体的な方法や視点を話し合ったり、校内研で各自の実践を交流したり、振り返りの価値や課題を整理したりすることで、評価改善を行った。

《取組3》学習段階を焦点化した授業改善

◇ 「たっちゅうスタンダード」の各学習段階を焦点化し、学習活動の質の向上を目指した。「つかむ」段階では、子どもが課題意識をもつための導入の工夫について、「広げ深める」段階では、協働学習の前の個の思考場面における子どもが自分の考えをもつための工夫について全体研修を行った。

(取組1、2、3の成果)

- 共通の授業の型があることで、教科の枠を超えてみんなで共通実践していこうとする意識が高まった。
- 「めあて」「まとめ」「振り返り」のある授業づくりを継続し、評価・改善を行ったことで、「めあて」「まとめ」「振り返り」の質の向上を図ることができた。
- 学習段階を焦点化した授業改善を行ったことで、授業改善のポイントが明確化され、実践しやすい取組となった。



【「たっちゅうスタンダード」に沿った学習過程】

	目的	大切なポイント
めあて	子どもが学び「目的のゴール」や「ゴールをそれまでの達成」を明確にする	①「めあて」の3要素(次の3つが入るめあて) ②「何故」「なぜ」 ③「どうするのか」【自己発動】
まとめ	子どもが単元・学習方法の整理・確認を行う	書き出しやカードをもち、子ども自身の言葉でまとめを書く
振り返り	①子どもが自分の学びを客観的に把握する(他者の育成・学びの可視化) ②教師が子ども一人ひとりの実態を把握し、個別の支援や授業改善、評価・評価学習につなげる	振り返りの3つの視点 ①「何を学んだのか」…知識・技能の視点(分らなかったところを共有) ②「どのように学んだのか」…思考力、判断力、表現力の視点 ③「どう生かしていくのか」…主体的に学習に取り組む態度の視点

【「めあて」「まとめ」「振り返り」について 共通実践している内容】

組織づくり

■ これまでの取組における課題

- 授業力向上を目指した人材育成システムが構築できていない。
- 全ての教師を巻きこんだ校内研修を行うことができていない。

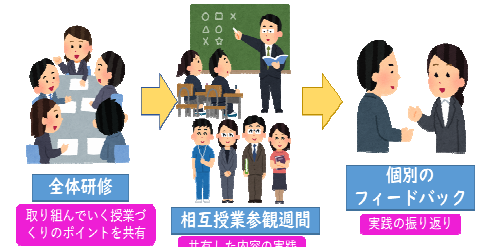
【課題解決に向けた取組テーマ】

～全ての教職員で一体感をもって推進する学力向上～

取組の実際(以下の取組が効果的だった!!)

《取組1》日常の授業改善システムの構築(相互授業参観による授業力の向上)

◇ 個々の指導技術や授業改善に対する意欲の向上を目指し、右図のような「相互授業参観システム」を実施した。教師同士が自由に授業を見合う相互授業参観週間では、授業場면을焦点化し、視点を示した参観シートを用いてお互いの授業を参観した。個別のフィードバックでは、授業後に「たっちゅうコアティーチャー※」が、授業参観の視点と指導技術等に関する個別のアドバイスをを行った。



【「相互授業参観システム」のイメージ図】

- 自分で改善ができていないのかわからないので誰かに見てもらうことはとても貴重な機会だった。
- 指導案作成などの負担がなく、日頃の授業を見てもらって、アドバイスを受けられるのは良い機会だと思う。
- 自信がもてたり、頑張ろうと思ったりするいいきっかけになった。

※ 「たっちゅうコア・ティーチャー」とは、学校独自に選出している授業改善の核となる教員のこと。

(取組1の成果)

- 全員で共通確認した授業づくりの取組内容を、日常での実践につなげ、客観的にフィードバックすることで、授業力向上と授業改善への意欲向上につながった。

【個別のフィードバック後の感想】

《取組2》授業改善の取組の日常化(たっちゅうカフェの実施)

◇ 学力向上に向けた取組に全教職員が主体的に取り組むことができるように、授業づくり等の取組に関する疑問や悩みを自由に意見交換したり、テーマに沿って様々なアイデアを出し合ったりすることができる「たっちゅうカフェ」を企画し、実施した。



【「たっちゅうカフェ」で 意見を交換する様子】

(取組2の成果)

- 授業づくり等について熱心に話し合ったり教え合ったりする教師の姿が見られ、学力向上に取り組む一体感が醸成された。

■ 授業づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 教師一人一人の授業における質の向上を図るために、主眼と教材分析を深める必要がある。
- ◇ 「たっちゅうスタンダード」に沿った授業づくりのポイントを明らかにするとともに、単元の「めあて」と「まとめ」を明確にした授業実践に取り組むなど、単元全体を見通した授業づくりを構想する必要がある。

■ 組織づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- キャリアや能力等に応じた指導力向上の支援体制が日常化できていない。
- 研究組織内の各部会の充実と共通理解が不十分であった。
- ◇ 相互授業参観の日常化や異教科で構成されたグループ研修の充実を図る。
- ◇ 研究組織内の各部会における取組の評価改善に向けた組織体制の見直し。

授業づくり

■ これまでの取組における課題

- 対話活動が不十分で、生徒の主体的な活動や活動時間が保証されていない授業であった。
- 授業の基本過程が統一されておらず、学習意欲を高め学習の成果を可視化できていなかった。

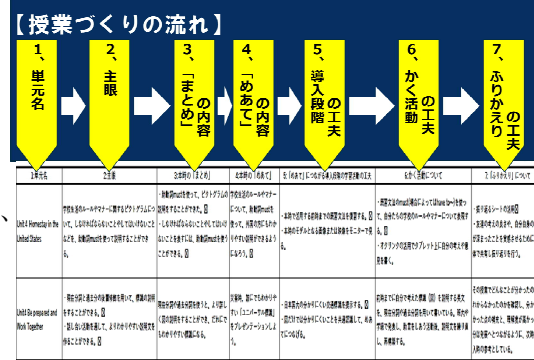
【課題解決に向けた取組テーマ】

～生徒の「学びたい」という意欲を引き出す授業づくり～

指導の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶大川桐薫中学校区共通実践事項集「問うくんナビ」の共通実践

◇ 小中学校で共通の授業づくりや学習活動のきまり等をまとめた「問うくんナビ」を作成し、授業改善に取り組んだ。具体的には、授業の導入段階に、実物や模型、ICT機器を活用した工夫を、展開段階に、「かく活動」に基づいた対話活動の充実を、終末段階に、「めあて」を意識させて「まとめ」を記述する活動、及び学びの変容を自覚させるための「ふりかえるシート」を活用した振り返りの活動を、それぞれ位置付けて共通実践に取り組んだ。



(取組1の成果)

- 生徒アンケートを昨年度2学期と比較したところ、「授業の『めあて』」、「友達と話し合う活動」、「まとめ」に関する項目について、肯定的な回答の割合が増加した。これらのことから、授業の学習過程の統一が生徒の主体的で対話的な学びに効果的であったと考えられる。

【授業づくりの流れに合わせて
 授業を構想することができる「授業づくりシート」】

◀取組2▶模擬授業を位置付けた授業研修会の実施

- ◇ 次の①～③の順序で授業研修会を行った。
- ① 授業者は「主眼」「まとめ」「めあて」「導入の工夫」「かく活動」「振り返りの方法」の順で、「授業づくりシート」を作成する。
- ② 5～6名ずつの異教科グループで「授業づくりシート」をもとに模擬授業を実施し、授業構想について意見交換を行う。
- ③ 授業者は学習指導案を作成し、学習指導案審議や再度模擬授業を実施する。



【模擬授業の様子】

(取組2の成果)

- 授業の構想段階での模擬授業を仕組むことにより、生徒の立場で「疑問」や「つまづき」「発想」を交流し合うことができた。異教科グループで授業研修会を行ったことで、日常の教育活動の中でも授業づくりに関する疑問や悩みなどを活発に意見交換ができるようになった。

■ 授業づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 「まとめ」や「ふりかえり」の活動の目的を十分に実感できていないため、「まとめ」や「ふりかえり」の場面で生徒自身に自分の言葉で記述させる取組が徹底できていない。
- ◇ 校内研修会において、「まとめ」「ふりかえり」を位置付ける目的を再確認するとともに、模擬授業の際に、生徒による記述を促す発問を協議するなど、全職員での共通理解のもと共通実践を図る。

組織づくり

■ これまでの取組における課題

- 学力向上に関する取組において小中間のばらつきが見られた。
- 研究組織はあったものの十分に機能しているとは言い難い状況だった。

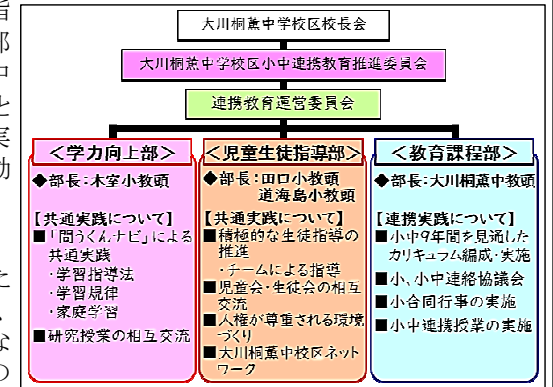
【課題解決に向けた取組テーマ】

～小中連携を中心に据えた組織づくり～

取組の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶小中連携した取組の実践

◇ 中学校区の小学校と連携した中学校区小中連携教育推進委員会を組織し、「学力向上部」、「児童生徒指導部」の各部署の部長に、中学校区の小中学校の教頭を位置付けるとともに、共通実践及び連携実践事項を明確にして小中連携した取組の充実を図った。



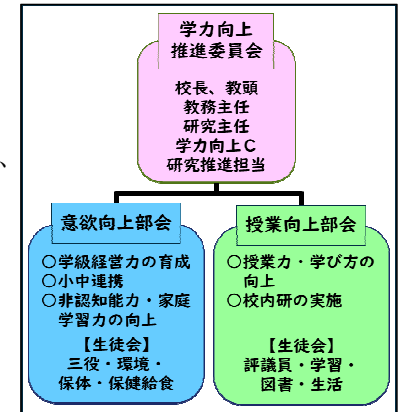
【大川桐薫中学校区小中連携組織図】

◀取組2▶研究組織の見直し

◇ 研究組織を意欲向上部会と、授業向上部会の2つに分け、それぞれの部会に生徒会の委員会を対応させることで、取組の活性化が図られるようにした。また、学力向上推進委員会を週時程に位置付け、日常的な授業改善に向けた取組の状況把握、評価・改善がスムーズに行われるようにした。

(取組2の成果)

- 各部会の取組が生徒会活動と連動して行われることが多くなり、学力向上に向けた取組の充実につながった。



【校内研究組織図】

■ 組織づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 小中連携の取組である「子ども自身に自分のことばでまとめを記述させる」、及び「ふりかえるシートを使ったふりかえり活動の実施」が不十分である。
- ◇ 校内の学力向上推進委員会及び小中連携学力向上部会において、「ふりかえるシート」の改善及びICTを活用した「ふりかえり」の具体化を進める。

授業づくり

■ これまでの取組における課題

- 学習過程における指導の工夫が教科の担当者任せになっており、共通実践できる手立てがない。
- 授業づくりについて、教科の枠を越えた協議ができず、交流する場での議論の深まりがない。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～「授業のグランドデザイン」を軸として進める授業実践の日常化～

指導の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶全教科で統一した1単位時間の学習過程

「授業のグランドデザイン」の作成

- ◇ 日常的な授業改善を進めるために、「めあて-見通し-思考活動-まとめ-振り返り」を位置付けた1単位時間の5つの学習過程と、各過程の留意点を示した「授業のグランドデザイン」を作成し、校内研修を通して共通理解を図り、共通実践につなげた。

(取組1の成果)

- 授業研修において、授業づくりについて教科の枠を越えて協議を行う姿が見られるようになった。各教科で授業のグランドデザインを意識した実践が見られるようになった。

◀取組2▶思考活動の充実

- ◇ 問題解決に向けて生徒の気づきを促すために、生徒が思考、表現することができるように思考方法、手立て、発問等をセットにした活動を展開段階に位置付けた。

(取組2の成果)

- 各教科において、生徒主体の学習活動を意識した授業づくりを心掛けるようになった。

◀取組3▶異教科グループでの授業研修

- ◇ 教科の枠を越えた授業交流を行うために、研究推進委員会の教員を中心に据え、経験年数等を考慮した異教科グループを編成した。また、授業研修では、生徒の参加・集中の変化から教師の指導・支援の効果を協議するために、授業参観シートと授業チェックリストを活用し、レーダーチャートの変容による授業(一人年間2実践)の見取りを行った。

(取組3の成果)

- 授業実践の交流が日常化しつつある。生徒の姿を中心とした協議を行うことができ、他教科での手立ての工夫を自分の教科の授業づくりのヒントとして生かすことができた。

山田中学校 授業のグランドデザイン～1単位時間の学習過程～

学習のながれ

ポイント・留意点

「めあて」をつくる

「見通し」をもつ

思考活動

まとめ

振り返り

【授業のグランドデザインの一部】

思考活動 頭の中をぐるぐる回す時間

【基本スタイル】

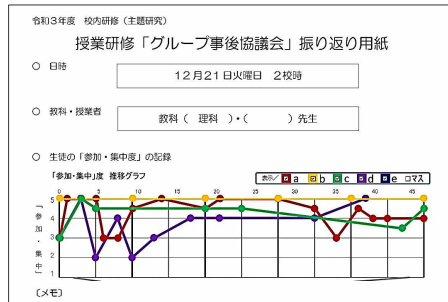
資料活用型 + 教材工夫型 + 中心となる発問

交流活動

考えを可視化・操作化する手立て

- ICT機器
- 思考ツール
- KJ法
- ホワイトボード
- 付箋を用いて
- 学習プリントなど

【思考活動の内容】



組織づくり

■ これまでの取組における課題

- 学力向上プランに基づく検証改善サイクルを意識した取組がなされていない。
- 学力四分位層C、D層への支援が個々の教員による工夫のみになっている。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～検証改善サイクルに基づく授業改善と学力基盤づくり～

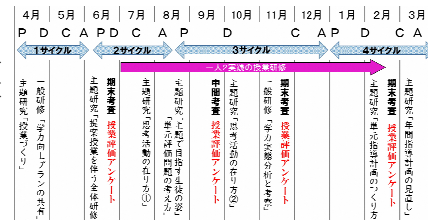
取組の実際(以下の取組が効果的だった!!)

◀取組1▶検証改善サイクルの確立

- ◇ 学力向上プランの計画的な実践のために、校内研修を主にP、C段階に位置付けた。特に、C段階における取組の振り返りを確実にを行った。

(取組1の成果)

- 授業改善に向けた成果と課題が明確になり、改善の方向性が具体化された。



【授業づくりに関する検証改善ロードマップ】

◀取組2▶授業評価アンケート分析シートの作成

- ◇ 自分の授業を見直し、改善につなげるために5つの学習過程に沿って分析できるシートを作成し、定期考査までの期間を1サイクルとして、授業を振り返る取組を行った。定期考査後に授業評価アンケートを実施し、分析結果を改善につなげた。

(取組2の成果)

- 教員個々が自分の変容を実感するとともに、シートを職員室内に掲示したことで、授業づくりの成果と課題、効果のあった取組を共有することができた。

令和3年度 授業評価アンケート分析シート 2年 理科

山田中学校 授業のグランドデザイン

1 学習過程

2 学習過程

めあてを設定する

見通しをもつ

思考活動

まとめをする

振り返りをする

全教員が1シート作成し、学力向上コーディネーターを中心に学力向上係が学年毎に一覧に整理して掲示

【授業評価アンケート分析シート】

ステップ1 教育相談の時間をとる。

心算ポイント

ステップ2 「自尊のめあて」を一緒に決め、取り組む内容を明確にする。

心算ポイント

ステップ3 「振り返り」を省かせ、次の日の教育相談で確認し、評価する。

心算ポイント

【全教員で確認した指導のポイント】

◀取組3▶全教員による学力四分位層C、D層への支援

- ◇ 学力層に合わせた学習支援を行うために、数学に絞って定期考査前に習熟度別補充学習を実施した。
- ◇ 定期考査前の期間を中心にマンツーマン方式で自学ノートを活用した家庭学習の支援を行った。

(取組3の成果)

- 全教員で教育相談を行いながら、抽出したC、D層の支援に取り組むことができた。

■ 授業づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 授業のグランドデザインは全教員に定着していることから、学習過程1つ1つの活動の質の向上を目指した実践の積み重ねと教員同士の交流の機会を増やしていく必要がある。
- ◇ 「書く活動」と関連付けた思考活動をさらに充実させるために、「学習でどのような生徒の姿を目指すのか」や「どのような学習活動や手立てが有効なのか」を、より具体的に考えられる研修を設定する。

■ 組織づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- マンツーマン方式での支援は、生徒の意欲の向上は見られたが、成績向上への成果に十分つながったとは言えず、今後、調査・分析する必要がある。
- ◇ 自学ノートを活用した家庭学習、補充学習等が連動した取組の展開を検討する。補充学習においては、実施時期や期間、方法の見直しを行う。

授業づくり

■ これまでの取組における課題

- 「椎田中授業スタンダード」の共通理解、共通実践が不十分である。
- 根拠を明確にして自分の考えを述べたり、説明したりする力を育成する学習が不十分である。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～根拠を明確にした「書く活動」を学習過程に位置付けた授業づくり～

指導の実際(以下の取組が効果的だった!!)

≪取組1≫学習過程における書く時間の確保

- ◇ 1単位時間の学習過程に、学びのユニバーサルデザインの視点を取り入れた共通実践事項を位置付けた「椎田中授業スタンダード」を活用して授業改善に取り組んだ。また、展開段階に「書く活動」を位置付け、「考える時間(個人思考)」、「話し合う時間(交流)」、「まとめる時間(個人再思考)」を設定するとともに、試行錯誤した内容を表現する時間を確保して授業づくりに取り組んだ。

≪取組2≫調査問題等の活用と「問いの工夫」に焦点をあてた授業づくり

- ◇ 生徒に身に付けさせたい力が明確に示されている全国学力調査等の問題を活用した授業づくりに取り組んだ。具体的には、調査問題等を、導入・展開・まとめのどこで活用するのか、どのように活用するのか、などの活用方法を「調査問題等の活用パターン」に示す3つの型に合わせて工夫したり、why、whichを基本の問い方とした「問いの工夫」を行ったりして、全教科で根拠を明確にした「書く活動」の充実を図った。

(取組1、2の成果)

- ゴール像を明確にした授業づくりにつなげることができた。また、生徒の考えを深めさせる問いを考えることができた。

≪取組3≫協議会における授業観察シートの活用

- ◇ 「椎田中授業スタンダード」に沿った「授業観察シート」を作成した。授業参観の際、課題となっている評価項目を重点評価項目に設定し、課題を意識した日常的な授業改善に取り組んだ。

(取組3の成果)

- 重点評価項目を設定したことで、協議の視点が明確となり、活発な協議を行うことができた。

■ 「書く活動」のポイント

- 「考える時間」、「話し合う時間」、「まとめる時間」を確保する。
→考え方のモデル(主張、根拠、理由づけ)に基づき、書かせる。
- 表現の仕方は多様な方法を提示し、生徒が選ぶようにする。
- 机間指導で言葉かけを行う。
(賞賛やヒント、つまづきを次に活かすことができるような言葉かけ等)

【「書く活動」のポイント】

- 「Ⅰ型」:調査問題等を、導入・展開場面において、自分の考えを深める問題として活用する。
- 「Ⅱ型」:調査問題等を、まとめの場面において、評価問題として活用する。
- 「Ⅲ型」:調査問題等を、単元末や定期考査等において、単元評価問題として活用する。

【調査問題等の活用パターン】

1	導入	「めあて」に結びつく活動や発問・指示・説明があった。
2		生徒の課題意識を高める「めあて」の提示があった。 ※内容・方法・活動等がわかる「めあて」
3		思考を働かせるための資料・教材は適切であった。 ※類似問題、写真、統計資料、新聞記事など
4		UDLの視点に基づき、個に応じた適切な資料・教材を準備している。 ※学習プリント、ヒントカード、学習形態など
5	展開	活動に適した時間配分や学習形態の工夫があった。
6		課題に対して個人思考を通して自力解決している。 ※主体的に根拠ある自分の考えをもち、「書く(記述)」
7		課題に対して「対話的活動」の場があった。 ※自分の考えを発表・交換
8	まとめ	学習内容を確かめさせる(振り返らせる・定着させる)活動を行った。 ※「虎の巻」の活用、振り返りの記述など
9		「めあて」に応じた「まとめ」を行った。

【授業観察シートの評価項目】

■ 授業づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 「めあて」に対応した「まとめ」の位置付け、意図的な「振り返り」の実践が不十分である。
- 「問いの工夫」について、各教科の実践は積み上げられているものの、根拠を明確にして書かせるための「問いづくりのポイント」を明らかにする必要がある。
- ◇ 課題を焦点化した校内研修を実施し、「めあて」「まとめ」「振り返り」の活動等の質的向上を図る。

組織づくり

■ これまでの取組における課題

- 検証改善サイクルが浸透しておらず、組織的な取組になっていない。
- 研究推進体制の役割分担が不明確である。

【課題解決に向けた取組テーマ】

～「授業づくり」を支える検証改善サイクルの確立～

取組の実際(以下の取組が効果的だった!!)

≪取組1≫学力向上プランに基づいた「検証改善ロードマップ」の作成

- ◇ 学力向上プランの取組を組織的に推進していくために、右のような検証改善ロードマップを作成した。取組の内容、時期をまとめるとともに、担当者を明記し、確実な実施につなげた。

(取組1の成果)

- 各担当者との連携を図り、進捗状況を確認しながら研究を推進することができた。また、役割が明確となり、当事者意識が高まった。

≪取組2≫異教科グループによる相互授業参観

- ◇ 全教師を3つのグループに分け、「授業観察シート」を活用し、相互授業参観を実施した。グループは、ミドルリーダーの担当教科や経験年数などを考慮してOJTが充実するように構成した。

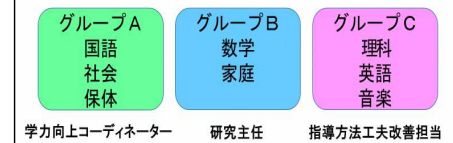
(取組2の成果)

- 同教科では見えない異教科からの指導内容や指導方法等の指摘が授業改善につながり、学校全体で組織的に取り組むことの大切さを実感することができた。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
学力向上推進部 管理委員会		P	D	C	A	P		D	
全国・県学力調査等		全国学力調査実施(21日)	県学力調査実施(16日) 中間考査	期考査 筑前県総合運動会(7日)	全国・県学力調査実施(16日)	中間考査	期考査	筑前県総合運動会(11日)	
内容	総合	「椎田中授業スタンダード」の実践「学びのユニバーサルデザイン」によるわかる授業づくり・身に付ける							
学力調査	高木	・勉強態度、勉強分析	取組2		・全国・県学力調査結果分析		取組2		
めあてどきめ・振り返り等の充実	大田原		・強化月間・グループによる相互参観		日常的な授業参観(教務、研究 主任、指導方法工夫改善)			・強化月間・グループによる相互参観	
取組2		「Ⅰ型」「Ⅱ型」「Ⅲ型」の検討・実施→結果の検討→指導内容、方法の検討→再							
活動の活用	緒方	・強化月間に向けた参観を促進した授業参観	・活用強化月間・グループによる相互参観	・活用強化月間		・強化月間に向けた参観を促進した授業参観	・強化月間・グループによる相互参観		
書く活動	緒方	「考える時間、話し合う時間、まとめる時間」の確保→自分の考えを書く、話し合った内容を書く、話し合った結果の自分の考えを書く							
授業参観	高木	・異教科参観・異時参観	・異教科参観・異時参観				・異教科参観・異時参観	・異教科参観・異時参観	

【検証改善ロードマップ】

- 取組強化月間を設定し、1人1回の公開授業
- ミドルリーダーをグループリーダーとし、人数や年齢構成などを考慮した3グループを構成



【異教科グループ構成図】

■ 組織づくりの取組における課題(●)、及び次年度の方向性(◇)

- 部会の設定が不十分なため、担当者任せになっている。
- 若年層、ミドル層、ベテラン層によって当事者意識に差がある。
- ◇ ミドルリーダーを中心としたより細分化・詳細化した「検証改善ロードマップ」を作成し、各部会を中心にして教師の横のつながりの強化を図る。